下関市立大学論集　第49巻　第2号（2005年9月）

『ジュリアス・シーザー』の眼

相　原　信　彦*

1　はじめに

1599年に書かれたと考えられている『ジュリアス・シーザー』より数年遅れていわゆる「悲劇の時代」に書かれた『リア王』に，作品の主題の一つが象徴的に＜視覚＞と＜言葉＞の両方で舞台上に現れる場面がある。命令に反し，リア王に味方したという理由でコーンウォールから両目を抉り取られたグロスターは，以前彼と彼の父親から土地を借用しており，目の見えない彼に今道案内役をかってでようとする老人の申し出を拒否する。

Gloucester: I have no way, and therefore want no eyes:
I stumbled when I saw. Full oft'tis seen,
Our means secure us, and our mere defects
Prove our commodities.
(4. 1. 18-21)

包帯が真っ赤に染まるほど抉られた両目のあとから出血しているグロスターに目が見えるはずはない。一歩進むごとに何かに躓き，心と身体両方に受けた深い傷がそれ以上足を先に運ばせる気力さえ彼から奪ってしまっている。両目を奪われたことよりも，愛していた息子エドマンドにまんまと欺かれ，無実のエドガーを追いやってしまった己の愚かさが彼を絶望させ，「進むべき道はない，だから目などいらぬ」と言わせているのであろう。この「目」は自分の目と同時に代わりとなって道案内してくれる他人の目も意味している。彼自身の愚かさが原因とはいえ，彼を騙したエドマンドの狡猾さとコーンウォールの目を抉り取るという非人間的な行為を目の当たりにした観客は彼のこの言葉に同情する。しかしながら，グロスターを同情する気持ちが消えないでいる観客の心に，驚きとはやや異なる何とも表現の仕様がない複雑な感情を引き起こしてしまう 'I stumbled when I saw.' という言葉をグロスターは口にするのである。「目が見えないから足を前に運ぶことが出来ない」とは言わずに「歩んでいくべき道がないから目などいらない」とは打ちひしがれた気持ちが言わせた言葉であるが，「目が見えていたときには躓いたものだ」は Heilman を引用し，説明を加えている Halio の注釈を待つまでもなくその意味するところは明白である。

'Gloucester here summarizes his whole career' (Heilman, p. 44). When he had eyes, he could not see what he most needed to see and understand, and thus he erred; blind and knowing what he knows, his actions are now without purpose. Colie (pp. 131-2) compares Isa. 59. 10, Matt. 13. 13, and Job 5. 14.

盲目となったグロスターに象徴的に現されている「目」「見る」といったこの芝居の主題はさらに正気を失ったリアの口からも観客に向って発せられている。「世の中の動きくらいは「見える」だろう」と尋ねた

* 下関市立大学助教授

リアに，グロスターが 'I see it feelingly' と答えたとき，先に引用したグロスターの 'I stumbled when I saw' にまるで呼応するかのように

> What, art mad? A man may see how this world goes with no
> eyes; look with thine ears.
> (4. 5. 144-5)

と諭している。勿論正気を無くしているリアには自分が言っていることが理解できているわけではない。しかしながら，第1幕でコーディリアの真意を見抜くことが出来ず，その後「躓いてばかり」のリアを見てきた観客にとって「目がなくっても世の中の成り行きくらいは見えるものだ。耳で見ればいい」とは重い言葉である。なまじ「目」を持っているからこそその目を当てにして，見えるものの正体を疑うことなく，目に入ってくるものが真実だと勘違いしてしまう。リアはさらに，人の目に写る物の姿など非常に頼りないものに過ぎないことをグロスターに伝えようとしているが，まさしく 'reason in madness' であり，私たちはその言葉の鋭い剣先に胸を衝かれ，リアやグロスターの愚かさを詰るだけではすまなくなる。

> See how yon justice rails upon yon
> simple thief. Hark in thine ear: change places, and handy-
> dandy, which is the justice, which is the thief?
> (Ibid., 145-7)

「見る」という主題は『リア王』だけのものではない。晩年に書かれた『嵐』にしても大きなテーマは「和解」であるかもしれないが，それに至るまでの裏切りなどの行為はやはり「見る」ということと関連しているものである。又，『リア王』と同時期に書かれた『マクベス』にしても，ここで詳しく論じている余裕はないが，「価値観の崩壊」というテーマの根底には，抽象的な意味も含めて「見る」という時に人を進むべき道とは違った道へと誘ってしまう行為があることを，私たちはそれこそ見過ごすわけには行かない。大げさな言い方が許されるならば，ある意味でシェイクスピアの全作品に流れている人間の「眼」の不確かさといったものが，「悲劇の時代」の直前に書かれた『ジュリアス・シーザー』においてどのように扱われているかを考えてみることが本論の目的である。

2　ジュリアス・シーザー

小田島雄志氏はブルータスを「近代人の一人」と考える。

> もしも自分のなかにもう一人の自分がいることを自覚した人間を「近代人」と呼ぶならば，『ジュリアス・シーザー』(*Julius Caesar*) の主人公ブルータス (Brutus) を最初の近代人の一人に数えていいかもしれない。「二つの魂が，ああ，わが胸のうちに住む」と言ったゲーテ (Goethe) の『ファウスト』(*Faust*) の主人公を近代人の頂点と見ていいように。[1)]

確かに，ジュリアス・シーザーは劇の半ば第3幕第1場で小田島氏がこの劇の主人公だと考えるブルータスらによって殺害され，それ以降は第4幕で亡霊として少し登場するだけで，彼の死後はある意味でブルータスが中心となっているということも出来る。だからこそブルータスが主人公だという意見や，この劇のタイトルを『ブルータス』にすべきであるという意見もでてくるのかもしれないが，そのような論議は不毛なものであって，このタイトルの方が観客にアピールできると作者シェイクスピアが考えた，とでも結論付けるしかないだろう。それよりも，私たちはお互い政敵として争っているシーザーとブルータスが同じ種類の人間であるということを見逃してはならない。それは何も，シーザーのことを彼を殺害するにいたったブ

ルータスや，いわばシーザーの仇を討つ役割を演じているアントニーのいずれもがシーザーの「高潔さ」を繰り返し強調し，ブルータスを倒したアントニーがブルータスのことを 'This was the noblest Roman of them all:' (5. 5. 68) と同じくその「高潔さ」を称えているからではない。私がシーザーとブルータスに見る共通点とは，彼らに具わっているそのような性格ではなく，「はじめに」で触れた「目」である。そして同時に，シーザーやブルータスの「目」を考えた場合，その対比に位置しているのが個としてはあらわされてはおらず，集団として描かれている平民・群集であることを忘れてはならない。

岡村俊明氏は『シェイクスピアを読む』の中で，シーザーの洞察力，つまり物を見る眼を次のように捉えている。

> この言葉から分かるように，彼は洞察力は鋭いが，尊大で傲慢であるために，自分自身の洞察を生かしきれない人間として描かれているといえよう。[2)]

岡村氏はキャシアスの姿を見て，その中に危険な匂いを嗅ぎ付けているシーザーの「鋭さ，深さ」は認めている。

> Let me have men about me that are fat,
> Sleek-headed men and such as sleep a-nights.
> Yond Cassius has a lean and hungry look,
> He thinks too much: such men are dangerous.
> (1. 2. 192-5)

「肥えて，髪を奇麗になでつけ，夜もよく眠る」人間が安心で，「痩せていて，ひもじそうな顔をし，よく物事を考える」人間が危険かどうかはわからない。(もっともこのことはシェイクスピアが『ジュリアス・シーザー』を書くにあたって最も参考にしたとされている『プルターク英雄伝』をそのまま使っているだけだということも出来るが。) シーザーが信頼していたはずのブルータスの体型や，彼の髪型などはふれられていないので，ここはシーザーがキャシアスのもっている危険性を直感した，と言うしかないのかもしれない。ただ，岡村氏がシーザーの中に洞察力の鋭さを認めながらも，その鋭さを殺してしまった「傲慢さ」を感じたのは，キャシアスを不安に思うシーザーに対し，アントニーが「危険な男ではない。立派なローマ人だ」と打ち消した後の彼の言葉である。

> Would he were fatter! But I fear him not.
> Yet if my name were liable to fear
> I do not know the man I should avoid
> So soon as that spare Cassius. He reads much,
> He is a great observer, and he looks
> Quite through the deeds of men. He loves no plays,
> As thou dost, Antony, he hears no music;
> Seldom he smiles, and smiles in such a sort
> As if he mocked himself and scorned his spirit
> That could be moved to smile at any thing.
> Such men as he be never at heart's ease
> Whiles they behold a greater than themselves,
> And therefore are they very dangerous.
> I rather tell thee what is to be feared
> Than what I fear: for always I am Caesar.

Come on my right hand, for this ear is deaf,
And tell me truly what thou think'st of him.
(Ibid. , 198-214)

キャシアスの不満の原因は「自分よりも優れた人間を見ている」からではないのかもしれない。それよりも彼が不満に思っているのは「自分がシーザーと同じように自由な市民であり，食べるものも同じなら冬の寒さだって同じくらい耐えられる」にもかかわらず，シーザーが権力を独り占めしているからに他ならない。つまり，（昔シーザーとタイバー河で肝試しをしたときのことをわざわざブルータスに語っているところから判断するならば）自分より優れているのではなく，自分よりも劣っていると思っている男が勝利の栄冠を「独り占め」していることが我慢できないのである。要するに，これも『プルターク英雄伝』[3]にあるように，彼は，ブルータスとは違い「公益のためにシーザーの独裁を憎んでいるのではなく，私怨からシーザーを憎んだにすぎない。」言葉を換えれば，「ブルータスは支配・独裁そのものに反対し，キャシアスは支配者・独裁者を憎悪」しているに過ぎない。

A man of such a feeble temper should
So get the start of the majestic world
And bear the palm alone.
(1.2.129-31)

Rome, thou hast lost the breed of noble bloods!
When went there by an age since the great flood
But it was famed with more than with one man?
(Ibid., 151-3)

When could they say, till now, that talked of Rome,
That her wide walks encompassed but one man?
Now is it Rome indeed and room enough
When there is in it but one only man.
(Ibid., 154-7)

勝利の栄冠 'the palm' を独り占めされることに対する妬みと，自分よりも優秀な者に対して抱く嫉妬は別のものであり，その意味においてはシーザーの観察は間違っていることになる。しかし，キャシアスが謀反を企てようとしていることに違いはないので，シーザーが漠然とではあっても，キャシアスの「危険」な匂いは嗅ぎ取っているのである。ただし，当時の観客に一番受けたのは，芝居を観に来ている観客を前にシーザーがキャシアスのことを「芝居が嫌い」'He loves no play' と言ったときであろう。当時の劇場は当局によって公序良俗に反し，周辺には売春宿などが集まるある種いかがわしい場所であった。いかに貴族をパトロンにしていたとはいえ，そのような劇場に集まる連中にろくな奴がいるはずがないとシェイクスピアはシーザーの口を借りて当局をからかったものであろう。拍手喝采というところだろう。私はこのようなところにシーザーの人間くささを感じるのであるが，同時にキャシアスが指摘した「尊大さ，傲慢さ」を否応なしに感じさせる箇所があることを見過ごしてはならない。「決して怖れているわけではないが，自分の名前がつまりシーザーが何かを恐れるとすれば，それはキャシアスくらい避けたいと思う者は他にない」と「シーザー」という名を出していること。そしてもう一箇所は「自分が何かを恐れているのではなく，あくまでも何を警戒すべきか」という一般論を論じているだけで，何故ならば自分は「シーザー」だからである。彼は自分のことを三人称で言うことがあるが，それはシーザーという人物を客観的にとらえているからではなく，彼の心の中に一つの確立されたシーザー像なるものがあるからではないだろうか。そしてその

シーザー像とは彼が勝手に作り上げたものではなく，むしろ世間が彼が戦いに繰り返し勝利する間に作り出したシーザー像，つまり全ての者を見下ろすロードス島の巨人，巨大なアポロ像である。芝居を愛したり，音楽を聴いたり，片方の耳が悪かったり，癲癇もちであり，さらにタイバー河で溺れかかってキャシアスに助けを求める「弱さを持ったシーザー」は，第三者からすればその人物の持つ人間くささや温かみを伝えこそすれ，生身の人間としてマイナスとなる要因ではない。巨大であることをキャシアスのように陰では打ち破ろうとする者がいるとはしても，表面的には彼の巨大さを人々が賞賛し，その心地よさに酔ってしまっているシーザーに「弱きシーザー」は隠すべきシーザー以外の何ものでもない。だからこそ，雷鳴が轟き稲妻が走る中，キャルパーニアに外出を控えるように言われ，いったんはその気になる。しかしそのような時ですら，元老院への伝言に「巨人としてのシーザー」はこだわりを見せ，デイシャスに次のように命ずるのである。

And tell them that I will not come today.
Cannot is false, and that I dare not, falser:
will not come today. Tell them so, Decius.
(2. 2. 62-4)

さらに，キャルパーニアがデイシャスにシーザーが病気だと元老院たちに告げるように口を出したとき，

Shall Caesar send a lie?
Have I in conquest stretched mine arm so far
To be afeard to tell greybeards the truth?
Decius, go tell them Caesar will not come.
Ibid., 65-8)

と「三人称のシーザー」つまり「巨人シーザー」を強調するかのように，キャルパーニアを叱り付けるのである。ただ，デイシャスに理由も聞かずに元老院たちのもとには子供の使いではあるまいし，戻ることは出来ないと言われ，キャルパーニアが見た夢の話をする。その夢の解釈をデイシャスはシーザーの性格を考えた上で否定するのであるが，ここで興味を引かれるのは，シーザーがシーザーという名前に弱いことを十分承知しているデイシャスがその名前を連呼していることである。

シーザーが偉大な人物であることを否定するつもりはない。イタリアの普通高校で使われている歴史教科書には，「指導者に求められるのは，知性，説得力，肉体上の耐久力，自己制御の能力，そして持続する意志であり，カエサルだけがこのすべてをもっていた」と書かれているらしい。[4] キャシアスからタイバー河でシーザーが見せた弱点？を聞かされている観客は「肉体上の耐久力」という点に関しては疑問に思うかもしれない。しかしその偉大さに関しては，現在の偉大さというよりも，それが手におえないほど成長したときのことを危ぶむ声しか聞こえてこない。第1幕第1場は劇のテーマを何気なく観客に伝えたり（『リチャード3世』のように主人公が粗筋を伝えてしまうような構成もあるが，）全体の色調を決める働きをすることが多い。『ジュリアス・シーザー』ではローマの街上でシーザーの凱旋を待つ群集とその群集たちを取り締まり，非常さを諫める護民官二人が登場する。護民官たちは以前ポンペイを歓呼の声で迎えた群衆が，その血族を殺したシーザーを歓迎しようとしていることに怒りを見せているようには見えるが，彼らの不満はシーザーがポンペイの血族の血を流したことにあるのではない。

Murellus: Wherefore rejoice? What conquest brings he home?
What tributaries follow him to Rome
To grace in captive bonds his chariot wheels?
(1. 1. 31-3)

キャシアスがシーザーに抱いた不満の原因は，勝利の栄冠をシーザーが，それが事実かどうかは別として，一人占めしようとしたことであった。共和制をとっているローマにおいて，勝利は誰か一人に独占されるものではなく，あくまで集団としての国家が享受するものでなければならなかったからである。この護民官はキャシアスのような集団の利益をそれが建前であろうがなかろうが重んじているわけではない。あくまでも勝利のおこぼれを頂戴することができそうにないことへの不満をくちにしているだけである。しかし，群集を追っ払った後護民官の一人フレイヴィアスが現在のシーザーではなく，「そうなるかもしれないシーザー」を警戒した次の言葉は，この後もブルータスによってたびたび繰り返されるシーザー殺害の動機を予告するものであり，つまりは，この劇の少なくとも前半のトーンを決めるほど重要なものとなっている。

These growing feathers plucked from Caesar's wing
Will make him fly an ordinary pitch,
Who else would soar above the view of men
And keep us all in servile fearfulness.
(Ibid., 71-4)

シーザーに王冠を捧げようと市民たちが歓声をあげる中，キャシアスはシーザーがロードス島の巨人としてふるまっていることをブルータスに念を押すように語りかけている。

Why, man, he doth destride the narrow world
Like a Colossus, and we petty men
Walk under his huge legs and peep about
To find ourselves dishonourable graves.
(1. 2. 135-8)

シーザーの偉大さが繰り返されるのと同じように彼の名前を何度となく観客は耳にすることとなる。第1幕だけでも40回以上彼の名前が舞台上で響き，私たちは否が応でもそれを意識せざるを得ない。それ以上に舞台に登場する人物たちは彼の名を意識しているのであり，ブルータスを口説き落とし，仲間にいれシーザーを暗殺しようとしているキャシアスの "what should be in that 'Caesar' ?" は，逆に彼がシーザーの名を意識していることを物語っている。名前はあくまで名前であって，必ずしもその人物の実態をあらわすものでないことは，ジュリエットが恋に落ちた相手は仇の家の息子であることを知らされ嘆く有名な台詞の中に表現されている。

O Romeo, Romeo, wherefore art thou Romeo?
Deny thy father and refuse thy name.
(2. 2. 33-4)

'Tis but thy name that is my enemy;
Thou art thyself, though not a Montague.
What's Montague? It is nor hand nor foot,
Nor arm nor face, nor any other part
Belonging to a man. O be some other name!
What's in a name? That which we call a rose
By any other word would smell as sweet;
So Romeo would, were he not Romeo called,
Retain that dear perfection which he owes

Without that title, Romeo, doff they name,
And for thy name, which is no part of thee,
Take all myself.
(Ibid., 38-49)

確かに，バラはバラという「名前」が無くても同じ芳しい匂いを発するだろうし，ロミオも仮にロミオと呼ばれなくてもその素晴らしさに変わりない。「名は体を表す」という感覚はジュリエットにはない。ただ，『ロミオとジュリエット』が執筆された年は1591年から1596年までというふうに非常にあいまいではあるが，仮に1596年だとしてもそれから僅か3年ほどしか経っていないにもかかわらず，「名前」というものに対する捉え方，又は劇作家としての表現力が比べ物にならないほど深まっていることをこの『ジュリアス・シーザー』では感じざるを得ない。それはジュリエットの口を借りて名前が必ずしも物事の本質を表すものではないことを「説明」するのではなく，シーザーという名を執拗に繰り返し，本人にも自分を三人称でシーザーと呼ばせることによって，名前に対する拘りを『ロミオとジュリエット』のように直接的にではなく間接的に表現する作劇上の見事さのことである。

ジュリエットに従えば，シーザーはシーザーという名がなくてもシーザーであり，その偉大さに違いはない。ただ，同じように名前に対する拘りを使いながらも，『ジュリアス・シーザー』において，シェイクスピアはこの「名前」を巧みに使い，蛯原啓氏の言葉を借りるならば，シーザーが自らが抱く理想のシーザー像を演じようとしているところを描こうとしたと言える。もっと踏み込んで言うならば，シーザーが見せる名前への拘りは，自らの理想像を演じようとしているだけではなく，平民たちも含めた他者の目を意識してよりいっそうシーザーらしさを出そうとした結果だと言っても構わないだろう。

キャスカから天変地異の様子を聞かされ，そうした異常がローマの由々しき凶兆を指していると訴えられたシセロは次のように答えている。

Indeed, it is a strange-disposed time:
But men may construe things after their fashion,
Clean from the purpose of the things themselves.
(1. 3. 33-5)

これをシーザーに当てはめるならば，シーザーの眼には物事の姿がそのままの形では映らずに，「偉大なシーザー」の眼でみようとしたため，人間も含めた物事が本来の姿とは異なる歪んだ形でしか見えなかったということになる。これがシーザーの悲劇といえば言えるのであるが，『ロミオとジュリエット』よりも人間観察に深みが出てきているとはいえ，この作品では自分に与えられた「偉大なシーザー」を演じようとした主人公が描かれているに過ぎない。つまり，『リア王』において私たちが体験するような「王リア」への拘りの余り，逆に「王リア」を否定されたばかりではなく，人間としての存在そのものへの疑念に心身共にずたずたに引き裂かれたリアの壮絶さはまだない。'Et tu, Brute? — Then fall Caesar!' と最後まで自分を三人称で呼びながらシーザーは反逆者たちの刃に倒れるが，自分の「眼」の過ちに気づいた瞬間に倒れたシーザーとは違い，リアの苦しみはここから始まっている。もっと踏み込んで言うならば，シーザーで書き残した課題，つまり自己を，具体的に言うと自分の生き方なり，考え方，地位などをすべて 'nothing' なものとして白紙に戻すことの凄惨さをリアにおいて描いたのではないだろうか。リアが体験した「嵐」をシーザーは知らずに消えていっているとも言える。そのようなある種の深みがシーザーに感じられないのは，シェイクスピアがこの劇において政治の力学を書くことを主眼においていたからではなく，時代の要請や作家としての力量，または劇団のパトロンの指示など理由はどうであれ，いわゆる四大悲劇の中心的なテーマとも言える人間の内面的葛藤を十分に描くまでには至っていない。

シーザーにとってシーザーという「名前」は言ってみれば生きていくうえでの主義のようなものであり，その「主義」への強い拘りが見るべきものを見ることができない「眼」を生んでしまい，彼を破滅へと導い

てしまったと考えることが出来る。言いかえれば，「偉大なシーザー」が視野を狭めたことになるのだが，そのように一つの「主義」に拘り，逆にその「主義」に縛られ視野を狭まれた「眼」を持っているのはシーザーだけではない。

3　ブルータス

『プルターク英雄伝』からブルータスの人柄を表している箇所を幾つか引用してみることにする。

①哲学による教養を性格に及ぼし，重々しく柔和な天性を実践的な熱意を以って奮い起こし，徳性に対して最も調和を得ているように思われた（229頁）
②私の事より公の事の方を上に置くのが当然だと考え（232頁）
③恩恵を求める人の言葉を容易に聴かず原則と推理に基づいて立派な事を行なう点とが，何事に向かっても力強い遂行的な勢を示した（235頁）
④その知らせが届くと勿論取り乱したが，公の事を棄てず，悲しみのために家に走り帰ろうとはしなかった（246頁）

まさに清廉潔白を絵に画いたような人物で，キャシアスが友人たちをシーザーに対する陰謀に巻き込もうとした時，その友人たちがブルータスが指揮をとるのであれば賛成したと『英雄伝』にあるのも頷ける。「政治家はかくあるべし」と言いたくなるような人物として『英雄伝』には紹介されているが，初めて舞台に登場したシェイクスピアが描くブルータスは『ヴェニスの商人』のアントニーやハムレットを連想させるような，物憂げな様子である。

If I have veiled my look
I turn the trouble of my countenance
Merely upon myself. Vexed I am
Of late with passions of some difference,
Conceptions only proper to myself,
Which give some soil, perhaps, to my behaviours.
But let not therefore my good friends be grieved
(Among which number, Cassius, be you one)
Nor construe any further my neglect
Than that poor Brutus, with himself at war,
Forgets the shows of love to other men.
(1. 2. 37-47)

'passions of some difference' と 'himself at war' がいずれもシーザーが原因であることはキャシアスとの対話の中で明らかとなる。キャシアスがシーザーを恨み，謀反を企てようとしているのは，シーザーが権力を一手に握っているからではなく権力を一手に握っているシーザーへの個人的な恨み，妬みが原因と考えるべきだろう。その彼は，ブルータスが高潔な人物で不正なことに身を染めるような人間ではないことを十分に承知しながらも，民衆を道具に使い，ブルータスにシーザーに対する陰謀の一翼を担わせようと企む。シーザーへの愛情どころか，むしろ憎しみ以外の感情を抱いていないキャシアスとは違い，シーザーが共和制を無視し王になることは恐れているが，シーザーを愛しているブルータスはシーザーへの個人的な愛と国家への公的な愛との板ばさみに苦しんではいるが，いざとなれば個人としての愛を犠牲にする覚悟であることをキャシアスに打ち明けている。

I would not, Cassius, yet I love him well.
But wherefore do you hold me here so long?
What is it that you would impart to me?
If it be aught toward the general good,
Set honour in one eye and death i'th'other
And I will look on both indifferently.
For let the gods so speed me as I love
The name of honour more than I fear death.
(1. 2. 82-9)

片方の「眼」には名誉を，もう一方の「眼」には死を見つめさせるがいい，とブルータスは口にしているのであるが，この中にすでに公の利益を優先させることが彼にとっては名誉なことであり，そのためには愛情を感じているシーザーの死を思い描いているのが分かる。しかしながら，これがもしも彼の言う「相克し合うある想い」'passions of some difference' だとするならば，文学を愛し，徳性を具え，重々しく柔和な天性を兼ね備えている人物が出した結論だとは素直には考えられない。何故ならば，もしも彼が本当にシーザーを愛し，且つローマという国の公益を最優先するのであれば，仮にシーザーが独裁者であったとしても「シーザーの精神だけを捉え，しかも肉体はそのまま」'O, that we then could come by Caesar's spirit/And not dismember Caesar!' の方法だって考えられるはずだし，そのほうが彼が進むべき自然な道だと思う。にもかかわらず，彼の中には「シーザーの精神」だけを殺す選択肢は全く存在していないと考えるしかない。松元寛氏は中野好夫氏に倣ってこのブルータスの論理を「論理の詐術」と呼び，次に引用するブルータスの言葉は「学者的理想主義から来る無意識の偽善以外の何ものでもない」ものが喋らせたものだと考えている。[5)]

It must be by his death. And for my part
I know no personal cause to spurn at him
But for the general. He would be crowned:
How that might change his nature, there' s the question.
It is the bright day that brings forth the adder
And that craves wary walking. Crown him that,
And then I grant we put a sting in him
That at his will he may do danger with.
Th'abuse of greatness is when it disjoins
Remorse from power. And to speak truth of Caesar,
I have not known when his affections swayed
More than his reason. But 'tis a common proof
That lowliness is young ambitions's ladder,
Whereto the climber-upward turns his face;
But when he once attains the upmost round
He then unto the ladder turns his back,
Looks in the clouds, scorning the base degrees
By which he did ascend. So Caesar may.
Then lest he may, prevent. And since the quarrel
Will bear no colour for the thing he is,
Fashion it thus: that what he is, augmented,
Would run to these and these extremities.

And therefore think him as a serpent's egg
(Which, hatched, would as his kind grow mischievous)
And kill him in the shell.
(2. 1. 10-34)
(下線は筆者)

殆どの話が仮定の話であるにもかかわらず，その仮定はすべて「殺さなければならない」という前提から出発したものである。「権力の弊害が憐みの心を失い」蝮が情け容赦なく無差別に他のものを殺すという一般論は，一般論としては否定しがたいものであるが，「殺さなければならない」という結論を納得できるものにするための方便に過ぎない。シーザーに関する事実としては「感情に溺れて理性を失くしたことがない」陰謀を企てるような「名分はない」ということだけである。

岡村俊明氏は，「民衆のための共和制を信じ，悶々とした迷いと不眠が続いた後」ブルータスは「私利私欲のためでなく，理想のために」シーザーを殺害したと評し，同時に彼がそのような行動に出たのは「高潔な理想家であるが，そういう人が往々にしてそうであるように，彼も人々の心の動きが読めない，具体的な状況でそれに対処する適切な判断ができないという弱点」を持っていたからだと考えている。確かに，民衆を前にしての演説はアントニーのそれに比べると人の心が分かっていないとも言えるかもしれない。そのことは認めるとしても，「私利私欲のためでなく，理想のために」どうしてシーザーを殺害することしか思い浮かばなかったのか，言い換えればどうしてシーザー殺しが前提でなければならないのかという問題の答としては不充分である。その点を考え，ブルータスの人物像に迫ろうとしたものに次の二つがある。

時としてブルータスはマキャヴェリ主義に堕している。不完全ながらも彼は，エリザベス時代特有の意味でのいわゆる「策士」である。自分の大義名分の公正さを確信しているから，他人の思わくなど関心がないというふりをよくするのだが，さりとて政治的策略を弄さないわけではない。(J. T. B. スペンサー)[6]

彼は，シーザーへの愛か，ローマへの愛かという二者択一において，前者を棄てて後者を選んだのではなく，むしろ，その二者択一のディレンマそのものを棄てて，シーザー暗殺という政治的決断をしたに過ぎない。彼は今，シーザーへの愛か，ローマへの愛かに悩むところから無限に離れた場所に立っている。というか，むしろそれとは全く別の次元に，知らぬ間に立たされているのである。(松元)

松元氏はさらに続けて，ブルータスは彼をこのような場所に立たせることになった「学者的理想主義」の醜さをも意識しておらず，言うなればその無意識の部分が彼に復讐するかのように襲いかかってくることによって彼の破局が生じていると考えている。

舞台という設定を離れ，ブルータスを現実の世界に生きている人間だと考えた場合，スペンサー氏や松元氏の批評は十分納得できるものであり，岡村氏のものよりも説得力があることも認められる。しかしながら，彼はあくまでも劇場という空間の中で，一つの与えられた役割を果たしているに過ぎない。つまり，彼が果たすべき役割はシェイクスピアがシーザー暗殺に加担する一味として描きながらも，自分の偉大さを追及しすぎる余り「眼」が見えなくなったシーザーと同じ道を歩んでいる人物として観客の目の前に登場させることではなかったのだろうか。

歴史上の人物としてのシーザーは「人間ならば誰にでも，現実のすべてが見えるわけではない。多くの人は，見たいと欲する現実しか見ていない」と言ったとされている。[7] その中にシーザーが自分をも含んでいたかどうかはわからないが，シェイクスピアは彼のシーザーに「シーザーは決して誤ったことはせん」と言わしめた。しかしそのこともシセロの口を通してシェイクスピアが訴えようとした人間の「眼」のいい加減さを強調するためではなかったのか。だからといって，まだこの作品を執筆している当時のシェイクスピアには，現実の本当の姿を見ることが出来ない人間の姿は描き出せても，まだ十分にその原因を突き詰めるまでには至っていないのではないだろうか。人並み外れた気高さを兼ね備えているオセロが簡単に最愛の妻の

不貞を信じ込み，殺害してしまう愚かな人間を描くとき，シェイクスピアには人間のどうしようもない性をありのまま描いて見せる，人間に対する絶望感と愛情が入り混じった強さが感じられる。『ジュリアス・シーザー』では，残念ながら人間の心の中に入っていこうとする様子は見られるものの，まだ自分に与えられた役割に振り回され，見るべきものを見ることが出来なくなっている段階の人間しか描ききれていないように思われて仕方ない。

蛯原氏はシーザーとブルータスに共通点を見，それを両者が本来自らに具わっている性質以上の自分を作り上げようとし，そのために現実のものとはかけ離れたそれぞれが「理想」とするシーザー像やブルータス像を演じることになっていると結論付けている。[8] 氏はブルータスがシーザー暗殺を決意したのはローマの自由のためであって，そのためにシーザー個人への友情を犠牲にしたと考える。ブルータスの中に世間が評価する高貴なブルータス像をよりいっそう絶対的な姿にしようとする意識があり，それが彼が言動の中で「私情を棄て公を重んじる高貴なブルータス」を徐々に強調していく原因となっていることは理解できるが，シーザーへの友情は果たしてどの程度のものだったのだろうか。ローマのためにシーザーを殺害するためには，シーザーがローマと市民にとって殺害されるだけの専制君主でなければならず，だからこそそのローマを解放することが高貴なブルータスをより高貴なものにする行動ではあるが，その上，彼がシーザーに対して個人的な恨みなどなく，むしろ愛していることになれば，それを犠牲にしてまでローマのために「仕方なく決断する」シーザー暗殺が，単なる陰謀ではなく高貴な輝きを増すことを彼が全く計算していなかった，と言うことは出来ない。だからこそ，中野氏はそのようなブルータスに「無意識の偽善」を感じ取ったのではないだろうか。しかしながらいずれにしてもブルータスも，シーザーが偉大であろうとするあまり「眼」が見えなくなったように，高貴であろうとするあまり，群集の心理やアントニーの計略などを読み取る「眼」を奪われたのだと言うことは出来る。

以上見てきたように，政治劇である『ジュリアス・シーザー』は本音と建前を使い分ける政治の邪悪さを描いていると同時に，人間の「眼」の不確かさを二人の主人公シーザーとブルータスによって描いた作品だと言っても言い過ぎではない。

4　おわりに

中野氏は『シェイクスピアの面白さ』の中でブルータスを「高潔で，理想家で，頭もよく，政治哲学もちゃんともっているが，肝心の民衆の心だけは知らない民衆から遊離した政治家」と評する一方でアントニーを「民衆の卑近な要求，そしてその心の秘密だけは，薄気味悪いほどに知り抜いている実際政治家」だと考えている。[9]

シーザーとブルータスを除けばこの劇の主な登場人物はブルータスをシーザー暗殺へ誘い出すキャシアスとアントニーであろう。しかしながら，それよりも私たちはアントニーが結果として利用することになり，ブルータスが絶えず意識し彼の行動を規定している「群集」がこの劇で果たしている役割を忘れるべきではないだろう。今ここでシーザーやブルータスとの違いを詳細に述べる余裕はないが，キャスカに「正直者」と呼ばれたり「有象無象」扱いされたり，「襤褸屑」同然に考えられている群集が果たしている役割をいずれ考えてみたい。一見すると状況への理解力は低く，護民官たちに非難されているように忘却力は大きいように思われ，ブルータスに続くアントニーの演説でつい先ほどまでブルータスを称えていたにも関わらず，そのようなことを全く忘れ，アントニーの言葉を論理というよりも感情で受け取っているようにも見える。更に，いったん火がついてしまうと目の前にいる人物がシーザー殺害に加担したのではない単なる詩人のシナであるとわかっても容赦なく攻撃してしまう，愚かと言うよりも恐ろしい存在である。シェイクスピアは主義や世間の目を気にする政治家を描くと同時に，第3の主人公として，本来絶対的なものでありうるはずのない「是か非か」という単純な判断を容易に人の言葉に踊らされて下してしまう愚かな群衆を描くこともわすれていない。

本論中シェイクスピアの作品は The New Cambridge Shakespeare 版を使用した。

1）小田島雄志『シェイクスピア劇のヒーローたち』（日本放送出版協会，1989年）
2）岡村俊明『シェイクスピアを読む』（朝日選書438，1991年）
3）河野与一訳『プルターク英雄伝　11』（岩波文庫，1977年）
4）塩野七生『ローマ人の物語　ユリウス・カエサル　ルビコン以前［上］8』（新潮文庫，2004年）
5）松元寛『シェイクスピア　全体像の試み』（渓水社，1979年）
6）T. J. B. スペンサー著，関本まつ子訳『英文学ハンドブック＜シェイクスピア　No 8＞』（研究社，1971年）
7）前出，塩野
8）蛯原啓『シェイクスピアの演劇的風土』「シーザーとブルータス――性格と演技をめぐって――」（研究社出版，1977年）
9）中野好夫『シェイクスピアの面白さ』（新潮選書，1975年）